

市民と行政の協働による寝屋川市内水辺の再生

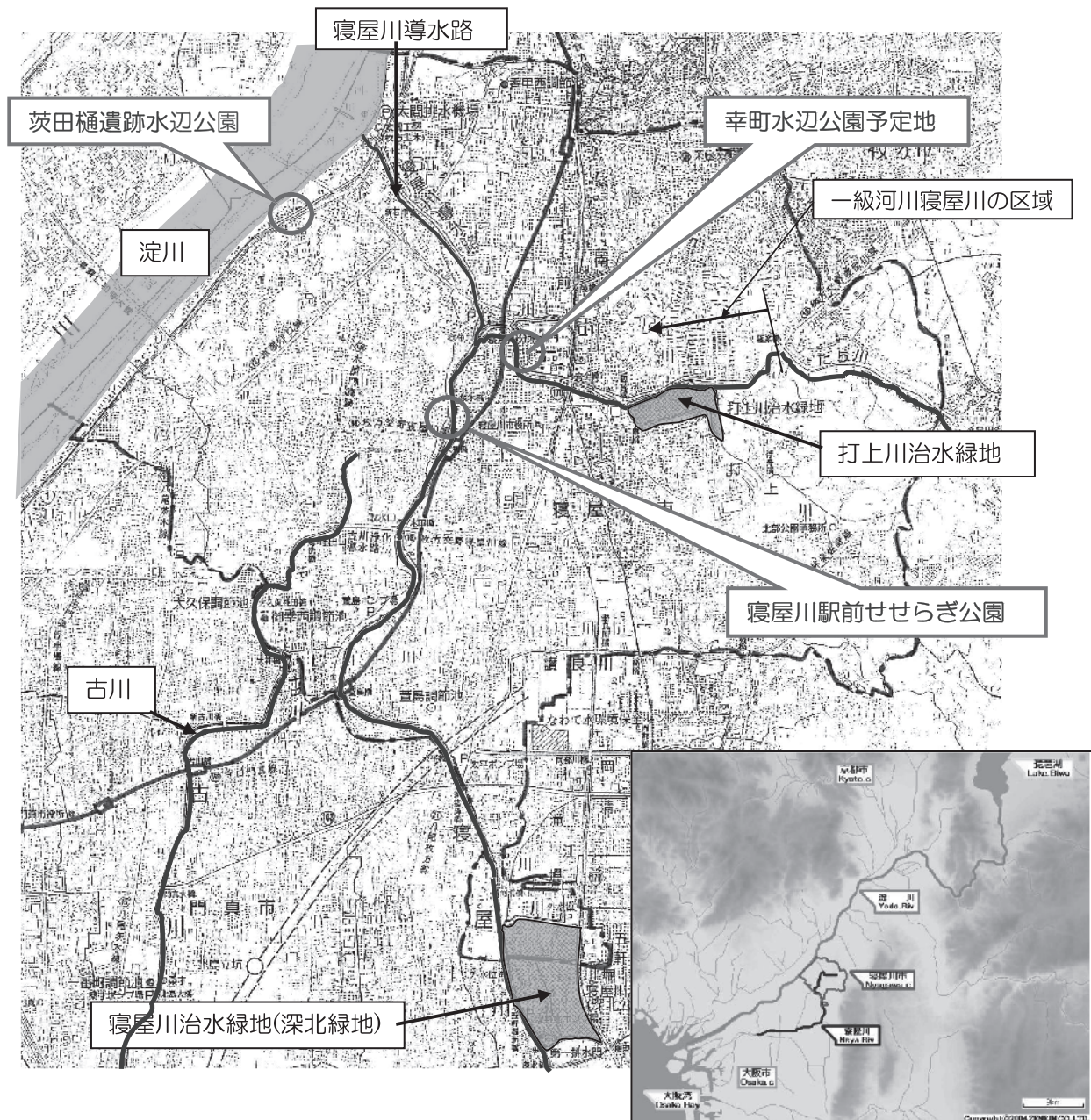
ねや川水辺クラブ

1. はじめに

私たちの暮らす寝屋川市には、一級河川寝屋川が流れています。

この寝屋川を中心とした市内水辺の再生をめざして、市民主体のワークショップで、「寝屋川再生プ

ラン」の策定をしたこと。さらには、プラン実現のために、「ねや川水辺クラブ」を誕生させ、川のソフトの市民活動を行ない、寝屋川せせらぎ公園などの、ハードの整備につなげてきた、市民のかかわりを中心に紹介します。



寝屋川市の位置

2. 市民協働による寝屋川再生ワークショップがスタート

一級河川寝屋川は、かつては、水質全国ワースト1、おまけに、急激な開発で水害にも悩まされ、治水を最優先とした整備が行なわれてきました。その結果、コンクリートと矢板、フェンスで囲まれ、人を近づけない、いつしか市民からは遠い存在になっていました。

平成13年、寝屋川市では、市制50周年を期に、この忘れられた川を、市のシンボルにふさわしく、生き物が生まれ育つ川に蘇らせ、市民の生活空間に取り戻すべく、市民協働による川の再生を図ることになりました。

ワークショップ委員を募集したところ、30名の定員に、なんと61名が手を挙げました。広く市民の参画を得るため、あえて全員を委員に委嘱しました。市の協働にかける意気込みが、公募委員のみによる前代未聞のワークショップを発足させたのです。

ワークショップでは小学生から大人まで、1年間、議論を重ね、平成13年度末、全体計画と重点整備箇所、再生における「市民の果たす役割」等からなる「寝屋川再生プラン」を提案。市民主体による初めてのまちづくり計画が策定されたのです。

3. 計画から行動へ：自主組織「ねや川水辺クラブ」の結成

計画策定で、終わらなかったのがこのワークショップ。

『プラン』実現化のためには、再生の機運を高め、市民合意を取り付けることが必要と、委員が中心となって、自主組織「ねや川水辺クラブ」を結成。多くの



ワークショップの際の川歩きの状況



駅前クリーン作戦の状況。胴長軍団と呼んでいます

市民に呼びかけ、様々な市民活動を開始したのです。

胴長靴をはき、ボートも持ち出すクリーンリバー作戦、田舟や大型カヌーの舟下り、生き物調査、川をよみがえらせるため、源流の山を育てる間伐作業などを精力的に展開しました。クリーンリバー作戦など清掃作業は、平成12年に30人で始めましたが、私たちに先行して個別に活動していた、団地自治会や青年会議所などと連携して、平成19年度は1500人にまで増えています。動員なし、全員自主参加が特徴です。

源流ハイキングは重要な取り組みで、生態系を学びながら、土砂流出・水源涵養、川の直線化、コンクリート化と参加者一人ひとりが無関係ではないことを、現場を体験しつつ学びます。

この他にも、自然型護岸の整備を昔の面影整備と称して、第11水路、点野農業水路等護岸整備、池田小学校わんど整備（開放型ビオトープ）などを実施しました。

4. 計画づくりだけでなく工事施工段階にまで関わる

このように、ねや川水辺クラブは、行政が取り組むワークショップと両輪で、河川再生の機運を盛り上げるための活動を行なってきました。それは、公共工事はまちづくりであるからこそ、官が計画し、粛々と工事を進めるのではなく、受益者である市民自身が要望・提案を越えて、様々な段階に当事者として関わることでまちづくりの一翼を担っていくという事例を示してきました。

これらの活動の甲斐があって、寝屋川再生プランの第1弾が実現。寝屋川市の玄関口である、京阪本線「寝屋川市駅」駅前の一級河川寝屋川親水空間

「寝屋川せせらぎ公園」の整備です。

ワークショップでは、基本設計から、実施設計、そして工事施工段階にまで「あーでもない、こーでもない」と3年にも及ぶ大阪府や寝屋川市とのキャッチボールを行ないました。それらが実を結び、大阪府の基盤整備、寝屋川市の修景工事を経て整備されたのです。

5. 寝屋川せせらぎ公園は「生き物にも人にも魅力ある空間」

そのコンセプトは、ズバリ『生き物にも人にも魅力のある空間』。

名称は市民公募で「寝屋川せせらぎ公園」となりました。この公園の特徴は、生き物が居着くよう、空石積み護岸や、瀬やワンドを配し源流域の野草や樹木を植栽する等、都会の中にありながらも本物の自然が味わえるよう工夫され、さらに、沈下橋や若い世代にも興味を持ってもらえるようなウッドデッキや車椅子や高齢者も楽しめる工夫がなされています。

こうして生まれ変わったこの場所は、今では、うなぎやテナガエビ、アユも捕獲され、せせらぎ水



寝屋川駅前整備前。犬走りにも下りることができませんでした



寝屋川駅前整備後。空石積みの護岸で様々な生き物が戻ってきました

路はナマズの産卵場所になるなど「生き物にも魅力ある空間」を実現しています。

一方、子どもたちの遊び場、七夕祭り、吹奏楽団の演奏、川の歴史散策や市民舟下りのスタート地点として、さらに、特筆すべきは、精神障害者の社会復帰活動ケアプランの一環として活用するなど、様々な分野の活動が行なわれています。

平成18年にはJICAの研修の場となり、平成15年頃からは中国からの企業研修生を、清掃活動や点野茨田樋の水辺公園整備ボランティアに受け入れるなど、小さな国際交流も実践しています。

このように「駅前せせらぎ公園」は、「人にも魅力ある空間」というコンセプトのもう一方も実現されています。

こうしてこの場所は、市民の様々なアイデアを盛り込み、都市の中にあつて、水と緑豊かな「生き物にも人にも魅力のある空間」へと変身しました。

6. 自己決定がやる気を生む

出来上がってからの市民の活動にも注目です。

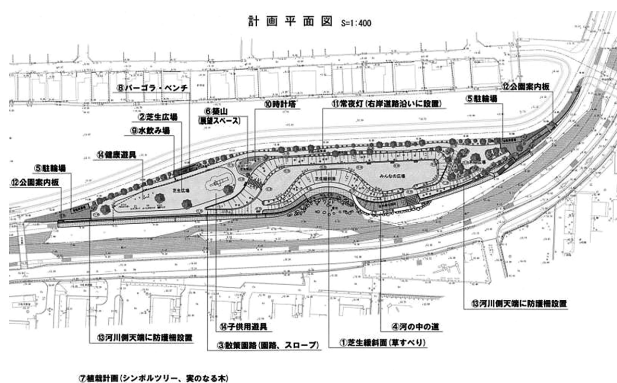
『自分たちの提案で出来た空間は自分たちで育てる』と、完成後の維持管理も、ねや川水辺クラブがプロポーザル方式で市から受託。週4日の朝の清掃活動だけではなく、草木のモニタリング、デッキ段差の解消、日陰を作るためモミジやベンチを設置したり、痛んだ丸木階段の修復もします。このように、市民の意見の反映は、市民のやる気を引き出します。

『自己決定がやる気を生む』この川づくりのキーワードです。

7. 第2弾 幸町水辺公園(仮称)：市民と住民が連携

しかし、このような川づくりは、ワークショップ委員や水辺クラブだけで行っても、ただの『好きものの活動』になりがちです。そこで私たちは、協働の質を高めるため、行政と協働して新しい試みを行います。それは、理念先行型の市民活動団体と、個別利害にとらわれがちな地元の住民が連携、さらには原則・前例主義の行政が歩みよることによって、提案する川づくりです。

こうして、第2弾は、大阪府営団地立替えに伴う幸町における親水空間づくりです。寝屋川せせらぎ公園では水量の変動のためできなかった「緩傾



斜で川まで降りる」ことができるよう、『子供たちが水遊びや環境学習のできる空間づくり』を目指しました。

ワークショップでは、市民と住民の連携が大切とワークショップ委員、水辺クラブに加え、地元住民、そして地域の子供達、隣接する府立高等専門学校、学校の先生や学生も加わりました。こどもたち110人ものワークショップも行ないました。ワークショップが始まる3年も前から川遊びや、生き物調査、清掃作業を子どもたちや地域の人たちと行なってきた成果です。平成19年度に、関連工事がはじまり、平成20年度完成予定です。ここでも、維持管理は市民の手で、との声も上がっています。

**8. 第3弾 茨田樋(まったのひ)遺跡水辺公園:
市民公共工事**

次に第3弾、これも、市民と地元住民の連携による取り組みです。何よりも、市民工事が一番の「売り」です。淀川から取水していた樋門跡を市民水辺空間として復元する取り組みです。

淀川に因む土木文化遺産、そのため自分たちで、淀川三川（宇治川、桂川、木津川）や寝屋川の源流部を走り回って資材の調達も行ない、市が行な

う基礎工事の他は、多くの工事を自分達で行なっていました。

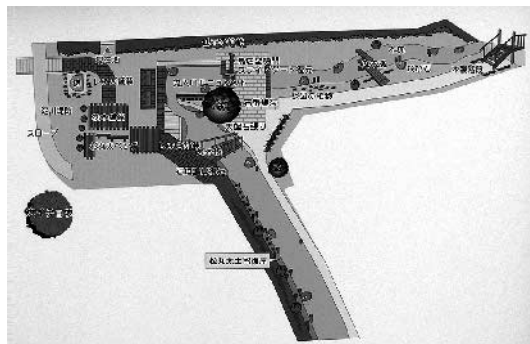
市民が持つ専門性を生かして、タコを使ってのくい打ちから、測量器を使っての高さだし、ユニボやユニックなどの重機も使いました。

間伐木等は、皮むきから乾燥、切断を行い、丸木橋や栈橋、樋門スライドゲートまで作ります。

植栽作業では、隣接する新興住宅の子どもたちや、地域のお年よりも参加して、低木や水生植物の植え付けを行います。

こうして、市民自ら、走り回り、体を動かし、市民公共工事ともいえる、市民の手作り整備で、『自然の復元と、地域に埋もれた川の文化を掘り起こし』「かたち」にした茨田樋遺跡水辺公園の完成です。

市民と住民が、自分たちに必要なものを自分たちで決めて作る。自分たちの想いがこもり、出来上がった空間に、愛着がわかないはずがありません。現に市民、住民が清掃や草刈等、維持管理を行っていますし、隣接する幹線水路では、舟下りが行なわれる等、地域のコミュニティも広がっています。『物を作って、人と人との関係も作る』これが、寝屋川から発信する川づくり・まちづくりの手法です。



自然が減り、文化が一律化し、まちづくりといえ
ば、規格化され金太郎飴と揶揄される現在にあっ
て、地域に埋もれた自然や文化資源を、市民、住
民自身によって、まちづくり・地域づくりに生か
すということは、まぎれもなく、地方分権・市民
分権の時代にふさわしい、まちづくりの手法であ
るということがいえます。

9. 様々な団体や組織とのネットワーク

活動の大きな柱であるクリーンリバー作戦では、
NPO団体、寝屋川沿いにある自治会、小学校、企
業など、多くの団体や組織が参加しています。ね
や川水辺クラブは、環境部会、清掃部会、歴史文
化部会、親水部会という4つの部会の活動があり
ますが、これらの活動にあわせて、様々な組織や団
体が参加、協力をしており、ネットワークも充実
しつつあります。

また、寝屋川市は、市内に立地する摂南大学や府
立高専とも、「大学連携」というかたちで協働関係
をつくっており、特に、摂南大学は、水辺クラブ
の日常的な活動にも積極的に参加し行動力を発揮
していただいています。

■ 様々な組織や団体とのネットワーク

- 大学等(摂南大学、府立高専)
- NPO団体等(水辺に親しむ会、自然に学ぶ会、
淀川愛好会、たち川を美しくする会、NOAC)
- 川沿いの自治会(寝屋自治会、香里三井団地自
治会連合会、幸町東自治会、府営三井秦団地自
治会、桜木町旭住宅自治会、桜木町自治会、若
葉町自治会、平池町自治会、清水町東自治会、
萱島信和町第1自治会、南水苑町自治会、萱島
信和町丸信自治会、萱島信和町自治会)
- 地域団体・企業関係(寝屋川ライオンズクラブ、
社団法人寝屋川青年会議所、トヨタ部品大阪共
販、ヤクルト、エクセディー労組)
- 小学校(中央小学校、北小学校、池田小学校、点
野小学校、成美小学校、宇谷小学校など)
- 子ども会(若葉町、平池町、寝屋など)

10. 今後の展開など：水辺ネットワークへの期待

平成13年に寝屋川市の呼びかけで始まった、寝
屋川再生ワークショップは、私たち市民が持って
いた水辺復活に対する気持ちやエネルギーを、水

辺づくりやまちづくりに生かす、大きなきつかけ
となりました。市民の自己決定や自主的な活動を
可能にしてきた行政の支援も、重要な要因であっ
たと思います。

現在、水辺クラブでは、市内に残された水路の再
生に向けた取り組みにも関わっています。かつて
市内にはりめぐらされていた水路は、その多くが
埋め立てられ、残っている水路はヘドロがたまる
など、水辺の潤いが乏しい状況です。このような
中、寝屋川市では、平成19年度からは、広く市内
水路を対象として、水辺再生のワークショップを
開始しました。水辺クラブとしても、この取り組
みに積極的に参画し、市内水路の調査と整備可能
地区の抽出に関わっています。

「市民と行政の協働による寝屋川市内水辺の再生」
には終わりはありません。今後とも、市民、行政
がお互いの意見を尊重しあい、活動を広げていき
たいと考えています。

ねや川水辺クラブの主な取り組み

- ① 市内水辺再生の取り組み（ワークショップを
行政が実施予定。これにねや川水辺クラブと
して積極的に参加）や淀川河川レンジャー活
動への積極的参加。
- ② クリーンリバー作戦（清掃部会。年2回。これ
まで同様に実施。自治会の申し出があればこ
れに行政と協力しつつ対応）
- ③ 親水活動（親水部会。4月の幹線水路などの川
下り、各地からの要請にこたえてのEポート
による船下りの提供など）
- ④ 歴史文化活動（歴史文化部会。1月第1日曜日
の源流ハイキング、源流部交野市内の間伐体
験活動年2回など）
- ⑤ 生物調査活動（環境部会。クリーンリバー作
戦にあわせた生物調査）
- ⑥ 駅前などの川を育てる活動（京阪寝屋川市駅
前の日常的清掃・モニタリングの活動、幸町
公園の可能性検討など）
- ⑦ 各種団体からの参加要請等への対応（河川清掃、
シンポジウム発表、自治会・学校・市民団体な
どへ出前講座、学校の総合学習への協力など）

文責 上田、久保田